

33 十九世紀アメリカ医学における

瀉血

藤倉 一郎

十九世紀初頭のアメリカでは瀉血が大流行であった。

それはアメリカ独立運動の立役者の一人、Benjamin Rush (1745-1813) の影響する所が多い。彼は医者で政治家であり、医学界にも発言力が強く、彼自身が瀉血を大いに勧めた。瀉血は殆どすべての疾患に治療法として行われた。一八三〇年から一八九二年にかけてアメリカで出版された瀉血に関する論文一篇のうち、僅かに三篇が、アメリカ人医師の著作であり、他はすべてヨーロッパからの輸入であった。最も影響をあたえたのは、イギリスの Marshall Hall とフランスの Louis であった。Marshall Hall は一八三〇年 *Researches Principally relative to the Morbid and curative effect of Loss of Blood in Philadelphia* と出版した。

Louis は *Researches on the Effect of Bloodletting in some Inflammatory Disease* を Boston から出版した。

Louis の場合は更に多くのアメリカ人留学生が彼のもとで学び帰国後彼の意を継いだ。このような状況でありながら、一九世紀のアメリカ医学界で瀉血が突然すがたを消した訳ではなかった。

Bryan は一八三二年から一八九二年までに出版されたアメリカの教科書二〇冊をとりあげて、瀉血についての評価を三疾患群で比較している。

教科書のリストは以下の通りである。

- 1831 Gregory Pittsburgh
- 1832 Martinet London
- 1833 Dewees Philadelphia
- 1840 Tweedie Philadelphia
- 1844 Mackintosh Philadelphia
- 1847 Wood Philadelphia
- 1849 Eberle Philadelphia
- 1856 Eweel Philadelphia
- 1857 Watson Philadelphia

- 1858 Wood Philadelphia
 - 1866 Flint Philadelphia
 - 1872 Watson Philadelphia
 - 1873 Flint Philadelphia
 - 1874 Hartshorne Philadelphia
 - 1881 Roberts Philadelphia
 - 1882 Palmer New York
 - 1884 Loomis New York
 - 1886 Flint Philadelphia
 - 1891 Hughes Philadelphia
 - 1892 Osler New York
- これらの教科書に記載された疾患を三群に分ける。
- G—1 狭心症、喘息、コレラ、てんかん、痛風、丹毒、間欠熱、麻疹、髄膜炎、腎炎、結核、猩紅熱、水痘、チフス、流行性耳下腺炎、黄熱病
 - G—2 気管支炎、咽頭炎、肝炎、腹膜炎、顎下腺炎
 - G—3 脳卒中、肺炎、肺浮腫、心膜炎

更に瀉血の治療適応をスコア化する。

- S—4 あらゆる疾患の治療が瀉血である。
- S—3 大部分の治療は瀉血、他の治療も使う
- S—2 条件付き瀉血容認
- S—1 ひるによる瀉血くらいは容認
- S—0 瀉血全面否定

教科書の発行年次と各疾患の瀉血適応のスコアとをグラフにすると十九世紀アメリカにおける瀉血の衰微の実体がわかる。

G—1 の疾患群は一八八〇年で瀉血は殆ど行われなくなった。

G—2 の疾患群は一八八〇—一八九二年の間に瀉血は行われなくなった。

G—3 の疾患群では一八九二年の段階でもまだ瀉血が少し行われていた。

(二期会藤倉医院)